

アダバ神話とアダム物語

片桐哲

生に對する執着、死に對する恐怖、是等是如何に深刻に遠き太古の時代より人類を悩まして來た事であらう。限りなく生き度いと云ふ願望、それは假令、素朴的な時間的延長性のものであつても、將亦、精神的な超時間的性質のものであつても、人間としての生に對する本質的な執着の表現でなくして何んであらう。あらゆる被造物に優りて聰明に、「只すこしく神よりも卑く」造られて「榮えと尊貴とを蒙り」し人類の間に、何が故に死と云ふ悲き事實が附纏ふて居るのであらうか。如何なる原因、如何なる理由に依りて、人類は死なねばならぬ運命を招くに到りしものであらうか。之等の疑問——生に對する執着と死に對する恐怖より誘因せられし種々なる疑問は、理性に醒めし人類に對して解くべく提供されし謎なのであつた。遠き過去の時代より人類は其の理知の限りを盡して、何等かの解答を提供し又は提供せんと試みて來たのである。其處に神話が生れ、傳説が現はれて來た。夫の創世記のアダム物語は、古代ヒブル人が此の問題に對して到達せし彼

等の神學的結論を、原人アダムを借りて表白したものであつて、實に、吾人は之の物語の中に古代ヒブル人の永生問題、死の問題に關する教理を興味深く見出す事が出来るのである。

此のアダム物語は、只に古代ヒブル人の神學思想たりしに止まらず、其の後のユダヤ教を貫く根本思想であり、更に、ユダヤ教より出でて、之の物語を劈頭に含む舊約聖書を、唯一の經典として出發せし初代キリスト教徒の傳統的に統襲せし神學思想であつて、宗教史學上より觀て盡せぬ感興をそゝらるゝものである。此のアダム物語の研究に對して吾人の見逃すべからざるものが一つある。それはヒブル民族の姉妹人種にして、先輩民族たるバビロン人の持てるアダバ神話である。此の神話は只にバビロン人の懷ける同一問題に對する宗教思想の表白としての興味のみならず、アダム物語の起原、若しくは背景と云ふ立場より見ても、特別の興味を引かるゝものである。以下少しくアダバ神話を紹介し、此の神話とアダム物語との比較並に歴史的關係を述べて見たいと思ふ。

一

此の神話を録せる、楔形文字の粘土板の破片が四個發見された。其の内三個はアッシリヤ帝國の首府ニネベに於ける、アッシリヤ王朝の最後を飾りしアッシュルバニバル王(Ašur-bani-pāli: 668

—626 B.C.) の宮殿の廢墟中の圖書室より、他の一個は遠く埃及のナイル河畔(百九十五哩上流)のテル・エル・アマルナ (Tell el-Amarna) に於ける、埃及第十八王朝のアーメンホーテフ四世 (Amenhotep IV) 又は Ikhnaton: 1375—1358 B.C.) の記録保存所より發見された。共に古きバビロニアの原本より復寫せるものである。此の四個の破片中二個は、記事重復して居る故に、全體としてアダバ神話の三部分を形成して居るに過ぎない。而して此の物語の主要部分は、實に、テル・エル・アマルナより發見せられしものに含まれて居るのである。此等の四個の破片に依つて物語の大體を窺ふ事が出来るが、破損の爲に、全體を回復する事が出来ないのは遺憾である。殊に第一部と第二部及び第二部と第三部との連絡點は各々數行づゝ脱落して居り、亦第三部の結末の箇處も破損して居る。更に第三部をなす粘土板は全體として破損の程度殊に甚しく、飜字飜譯を困難ならしめて居る。本稿の最後に附録として、拙譯であるが以上四個の破片の和譯を添へて、此の物語の原形の面影を偲ぶ一助となした。

此のアダバ神話は、明かに、二個の獨立せる神話を結合したる、一の綜合神話である。即ち春毎に山野に青き草木を甦らす春の陽神タンムヅ神とニンギシジダ神が夏至以後漸次衰へて、草木と共に枯死するを哀悼せる季節變化を主題とせる自然神話と、之と全然性質を異にせるアダバ物語との合成神話なのである神話發達史の立場より觀れば、可成進歩せる時期の所産と云はねばな

らない。

今此等四個の粘土板の破片が傳ふる、神話の梗概を解説的に叙述して見よう。

二

原始に、チグリス、ユーフラテス兩河の合してベルシャ灣頭に注ぐ處に、エリドの邑が建つて居た。此の邑にアダバなる原人が住んで居た。彼は海神にして、エリドの邑の守護神なるエア神の手にて創造せられ、大なる智慧を賦與されて神の如く聰明であつたが、永生は賦與されなかつた。彼は智くして衆人の首として立ち、全き人間であつた。此の半神的人間なるアダバは、エア神の神殿に奉仕して、日毎神前に供すべき麵包を焼き、水を用意した。夜はエリドの城門を嚴重に戸締してエア神の安眠を保證し、晨にはベルシャ灣頭に船を出してエア神の爲に漁をして居た。一日彼が海上に船を浮べて漁り居し際に、遽かに南風劇げしく吹き來つて彼の船を覆し、爲に彼は海中に落込んで了つた。是が爲に激しく怒つて、遂に南風の翅を折破した。茲に於て七日間涼しき南風は地上に絶えて、熱帶地のエリドの邑は耐へ難き暑氣に惱まされた。天上のアヌ神は己が配下なる南風が少しも吹き來らぬ爲に、使者イラブラトに其理由を訊ると、アダバの所爲と判明した。彼大に驚きアダバを天上の法廷に召喚して之を所罰せんとし給ふた。機敏なるエア神

は直ちに之を知り、己が創造せしアダバを救はんと、彼を召して彼が身に將に起らんとする事を告げた。而してアヌ神の領域なる天上に到りし際に、取るべき種々なる對策を彼に授けた。即ち汚き喪服を纏ふて、天の門に至るべき事、其の門を警護するタンムヅ神とギシジダ神か、喪服の理由を問はゞ、地上より消え去りし彼等兩神の爲なる事を告げて、彼等の心を和らげ以てアヌ神の前に、兩神の執成を乞ふべき事、アヌ神は死の食物と死の水とを饗應する故に、必らず心して其の前に供せらるる食物と水とは口にせざる事等を注意した。茲に於て、アダバはエア神の指圖の如く、喪服に身を包んで天の門に至り、警護の二神の同情を得て、彼等の執成に依りて、アヌ神の怒を解く事が出來た。既に天上地上の祕密を見極めたるアダバは神たる資格に充分であつた。故に彼に對して神格を賦與すべく、彼の面前に生命の食物と生命の水とを供し又衣服と膏油とを與へた。然るに彼はエア神の勸告に従つて、衣服は之を纏ひ、膏油は身に塗りしも生命の食物と水とは、之を辭退して了つた。アヌ神は之を見て異しみ、アダバに其の辭退の理由を訊ねた。然るに是れ實にエア神の命令なる事を知り、且つその爲に彼が千歳一遇の好機を逸して、永遠に、永生を失ひ去りしを彼の爲に歎いた。斯くして永生を得べかりしアダバは、之を逸して再び地上に戻つて來た。彼ま病苦と不安と戦ひつゝ死ぬべき運命に決定されて了つたのであつた。然し永生を失ひし代りに君主としての支配權を賦與されて、人類の父となるに至つたのである。之がア

ダバ神話の梗概である。

三

此のアダバ神話は、云ふ迄もなく、バビロン人の試みし死の實在に對する説明であるが、ヒブ
ル人の試みしアダム物語と對比して、如何に多くの共通性を有するかに驚かざるを得ない。

何れの神話に於てもそうであるが、此の神話もアダム物語と同様に、神人が極めて親密なる交
際をして居る神人同居の時代を假定して居る。而して人間にも一種の神性の存在を認めて居る。

此の神的屬性をば、智慧を以て象徴して居る。従つて此の智慧は、一種の神通力を有するもので
あつた。アダバは恐らく此の力に依つて、海上にて南風の翅を折る事が出来たのであらう。アダ
ムも智慧の樹果を食ひし結果は『神の如く成りて善惡を知る』様に成つたのである。人間が自己
の中に神性の存在を自覺せし事實は此等の物語の中に前提として表現せられて居る。其の表現の
形式は如何に幼稚であり、素朴であつても、人間が自己の無限の價値に目覺めし偉大なる事實に
異りはないのである。バビロニヤに於ては古から、人間の神性を信じて居る事は、バビロニヤの天
地創造神話の中にて、日神マルブークが己が骨と血とを割いて人間を創造したと云ふ物語に依つ
て尤も雄辯に表白せられて居る。ヒブル人は人間の神性をば、ヤウエ神がアダムの鼻に嘘入れしと

云ふ、神の「生命の息」の象徴に依つて表白せしめて居る。ヤウエ神はアダムを初め「野の諸の獸と天空の諸の鳥」も皆土より創造し給ふたのであるが、「生命の息」を嘘入れ給ひしは、アダム即人間丈けであつた。他の動物には之を嘘入れ給ひし事を何處にも物語つて居らぬ。兎に角、人間が有ゆる生物に優れる存在者であると云ふ信仰の表白に異りはないのである。

扱て此のアダバが賦與されし智慧は、如何に偉大であり、如何に神通力はあつても、永生を伴はぬものであつた。エア神はアダバに智慧を授け給ふたが、永生は授け給はなかつた。否之を授くる事を欲しなかつたのであつた。即ちアダバが天上のアヌ神の法廷に於て永生を獲得すべき好機をも、之を欺いて遂に逸せしめて了つたのである。之と同様に、ヤウエ神も『視よ夫の人我等の一人の如く成り善惡を知る然れば恐らくは彼其手を舒べ生命の樹の果實をも取りて食ひ無限生んと』(創三三)と云ひて之をエデンの樂園より追放して了つた。エア神の拒否と云ひ、ヤウエ神の追放と云ひ、其の形式に多少の差異こそあれ、人間が無限に生きる事の出来ないのは、所詮其の創造主なる神が人類の能力の擴大に對する嫉妬に原因するものと見做す點に於て同一である。之は無限に生きたいと云ふ人間の欲求が、死と云ふ事實に依つて滿されない現實をば、人間界の感情を、その儘神界に移して、神が人間の權力増大に對する嫉妬より遂に之を「拒否」「追放」したまふたものと見たのである。勿論拒否・追放の理由には兩者の間に大なる差異のある事は勿論であ

る。ヒブルの物語に於ては、アダムの樂園を追放せられて永生を失ひしは神の命令に對する不從順の爲であつた。即ち道德的理由であつた。然るにバビロンの物語に於ては、アダバは忠實なるエア神の命令の服従者であつたのである。アダムの如く不從順の爲に、永生を失つたのではない。エア神以外の神々は、アマを始めとして彼に永生を與へんと欲したのであつた。故にアダバが生命の食物と生命の水を辭退せし時に『アヌ神彼を見て異しめぬ、「來れアダバ汝何とて食ひ何とて飲まざりしや、故に汝は生きる事を得ざるべし」』云々と彼の爲に歎いたのである。如斯くバビロンの物語に於ては、人間の永生問題を中心にして、神々の間に賛否兩派に對立して、神話的色彩を濃厚ならしめて居るのであるが、是れは、要する處バビロン人の多神教的根柢の自ら然らしむる處であつて、唯一神教的ヒブル人の思想に於てはヤウエ神以外の何等の對立者をも許し得ない立場に立つて居るのである。然ども多元と一元との區別こそあれ、ヒブル物語を精細に點檢すれば實にヤウエ神の性格には、之のバビロニヤの對立的兩面の神格が、一つに結合されて居るを見逃してはならぬ。即ちエデンの園の有らゆる歡樂を自由に享樂せしめ、且つ多くの鳥獸を創り又配偶の婦を創り與へて、アダムを慰め給へる寛大慈悲なるヤウエ神は、同時に彼が知慧の樹果を食ひて神の如く聰明になり、生命の樹果を食ひて神の如く無限に生きる事を妬みて、彼を樂園より追放したまふ神なのであつた。即ちヤウエ神にはアヌ神とエア神が結合されて居るのであつて多神教的多元性と、

一神教的一元性の差異こそあれ、根柢に流るゝ思想に於ては同一體系上にあると云つて差支ないと思ふ。

更に兩神話の共通性を示すものは、永生は一種の食物を食ふことに依つて獲得せらるゝものと見て居る思想である。アダバ神話の生命の食物、生命の水、アダム物語の生命の樹果がそれである。勿論後者の物語には生命の水は見えないが、之の言葉は舊約聖書及び新約聖書には、到處に散見せらるゝもので、ヒブル人の思想の根柢に流れて居る一つである。夫の「河エデンより出て園を潤し彼處より分れて四の源となれり」(創二一〇)と云ふ叙述の中に、原始神話に活躍せし生命の水の面影を偲ばるゝ様に思はれる。後世豫言者エゼキエルは、復興の神都エルサレムのビジョンを畫げる中に、神殿の闕の下より流れ出てアラバの海に注ぐ河水を述べて、「凡そ此河の往く處は諸の動くところの生物みな生ん」云々(四七九)と云つて居る。即ち生命の水である。此の思想はアダム物語の表面から姿を消して居るけれども、兎に角永生は一種の食物に存在して居ると云ふ觀念が兩者の物語に共通に働いて居る點に變りはないのである。

又智慧の樹果を食せる後「ヤウエ神アダムと其の妻のために皮衣を作りて彼等に衣せたまへり」(創三二三)云々とあるは、明かに、アダバが「天と地との祕密を」啓示せられし理由を以て、即ち神智を獲得せるの故を以て、アヌ神より生命の食物と共に一種の衣服を賜はつたと云ふ點と相通ず

るものであつて、此處にも兩者の密接なる連絡の糸の引かれて居る事を認めざるを得ない。勿論アダバ物語にはアダバ物語の如く衣服と共に膏油を神より賜る箇所は見えて居らない。膏油は化粧品であつて之を身に塗布する事はセム種族の間には古今を通じて極めて廣く行はれて居る風俗であり、舊約聖書には到處に之を見るのである。恐らくは、以上の衣服と共に人類文化の進歩の象徴として原始神話に畫かれしものであらうが、ヒブル神話の著者には膏油の發明は衣服の發明に後るゝこと遠しと見做す、彼れ獨自の文明史觀の立場よりせるか、將亦他の見解よりせるか、今遽かに之を憶測する事は難いが、彼の物語には膏油の物語を載せて居らない。然し兩者の物語の密接なる連絡の存在に關しては、斯る一二の點の有無は大なる支障とは思はれないのである。

最後に兩神話の密接なる關係を雄辯に立證するものは、兩神話の到達せる結論が全然其の軌を一にして居ると云ふ點である。永生を失へるアダバもアダムも共に、悲しき運命を辿らねばならなかつた。即ち病苦と不安と勞役の中に一生を過さねばならなかつたと云ふ點である。アダバ物語に於ては、此の結末の箇所が破損の程度甚しく、充分なる叙述を見る事が出来ないが病苦、不安、悲哀等の文意は明瞭に讀まるゝのである。アダバ物語に於ては、今更之を取立て述べるまでもなく、アダムは終生の勞役と、イブは出産の苦惱とを課せられて一生を終つたのであつた(創三

四

以上の如く兩者の物語を、仔細に比較點檢すれば、物語の全體に通して離つべからざる脈絡の存する事を認めなければならない。勿論兩者の物語の形式上及び宗教思想上に於て幾多の差異の存する事は今更言ふ迄もない。既に述べたる如き「生命の水」、「膏油」の如き物語の共通に見えぬ點若しくは「智慧」を人間に賦與する神の態度の相違の點、即ちエア神は之を惜みなく、創造と共にアダバに與へて居るが、ヤウエ神はアダムに之を與ふる事を欲せずして、智慧の樹に手を觸るゝ事を禁ぜし如き、其他種々なる點に於て相違を見出すのであるが、此等の相違にも増して、兩者の類似點の色彩濃厚なるは誰しも認めざるを得ない處である。

此の兩者の物語が發生學的に如何なる歴史的連絡の存在するかは、容易に之を明かにする事を許されないが、少くも此の物語の發祥の地はバビロニヤである點に就ては今更論する迄もない處である。エデンの園の地理的敘述は決定的に之を立證して居る(例二八・一四)。民族意識の強列にして、自負心の高きヒブル人の獨創になれる物語とすれば、人類發祥の地を何が故に自國パレスチナに取らなかつたであらうか。業々遠きバビロニヤの彼處に、之を求めねばならなかつた理由は如何に之を説明すべきであらうか。是は先輩民族の教を學びし後進民族の知識の表現として

始めて了解し得らるゝ處であらうと思ふのである。然らばヒブル人は如何なる經路に依りて、之の物語の知識を得るに至つたものであらうか。

埃及のテル・エル・アマルナの地より發見されし、アダバ物語の楔形文字の粘土板は、同所に發見せられし數多の粘土板と共に、埃及第十八王朝のアーメンホーテ、四世(1375—1353C)の記録保存所より出でたるもので紀元前十四世紀のものである。此のアダバ物語の粘土板には、楔形文字の單語と單語との間に一々朱點を施して、初學者の學修の便を計つてある所より見れば、埃及の外交官養成所に於て、當時の外交語たりしバビロン語の教科書として使用されしものと推察せらるゝのである。如斯、之のアダバ神話は少くも前紀十四世紀迄には、バレスチナを通過して埃及に到達して居る處より察すれば、此のバビロニアの神話が、バレスチナの地に移植せられしは如何に少く推斷しても十四世紀遙か以前と見ねばならない。夫のハムラビ大王を以て有名なるバビロン第一王朝の文化は、前紀二十世紀頃には、既に地中海沿岸より埃及の境にまで波及して居つた事は、古記録の明かに示す處であつて、バビロン語は長く是等の地方に於ける官語として通用せらるゝに至り、埃及の支配下に歸せし後も依然とし使用せられて居つたのである。前述のテル・エル・アマルナより發見せられし數多の粘土板は、實に當時スリヤ、バレスチナ地方に於ける太守達か、其の支配者なる埃及のバロヘ致せる書翰であつて、皆埃及語に非ずして實にバビロ

ニヤの楔形文字を以て認められて居るのである。如斯く此等の地方にはバビロン文化は古くより深く浸潤して居つたもので、其の痕跡は各地に印せられたる、バビロンの地名に依つても瞭かに推察する事が出来る。例へばバビロニヤの月神シン(Sin)・禮拜と關連して起りしと思はるゝバレスチナ南方の「ジシの曠野」(出一六一)、ジンアイ山(即ちシナイ山 Sinai 出一六二)、或はバビロニヤの智慧の神ナブ(Nabu)に因みて起りしと推せらるゝヨルダン河東の「ナブの山」(即ちネボ山申三二四九)等の如きがそれである。如斯くバビロニヤの文化は古くからバレスチナの地に波及して居つたのであるから、バビロニヤのアダバ物語も古くからバレスチナの地に移植せられて居つたものと推定するは、極めて歴史的な判斷であると云はねばならない。ヒブル民族がバレスチナの地に姿を現はしたるは十二世紀頃であるが故に、少くも彼等の侵入以前數世紀間アダバ物語はバレスチナの地に於て培養せられ、地方化せられて居つたに違ひないと思はるゝのである。此の時代は口碑文學の時代であつて、口々に語り傳へられて居つたのであるから、其間に種々の變化が生じて來た事も推察せらるゝのである。故にヒブル民族がバレスチナ侵入後、土着文化を自己の所有となす迄には、アダバ物語にも幾多の變化が生じて、漸次原型を離れて行つたに違ひないと思はるゝのである。茲に前述のバビロニヤ及ヒブル兩神話の種々なる相異點の第一原因が説明出来るのではあるまいか。更にビルブ人の手に歸して以來は彼等の進歩せる宗教道德の感化

に依つて根本的改革を蒙る運命に遭遇したるは想像に難くないのである。茲に第二の根本的兩者の相違點の原因が説明せらるゝと信するのである。實にヒブル人のアダム物語は確かにバレスチナ化するバビロニヤのアダバ神話を材料として使用したものであらうが、彼等の唯一神教と高き道德意識との淨火に純化せられて、エア神對アヌ神の反目、欺瞞等の幼稚低級なる多神教的、神話的色彩は殆んど其の影を薄くして神をば正義の神と觀じ、其の命令を意識的に犯す處に、人間の罪惡の起原を置き、其の罪惡の結果は唯に自己一人の不幸を來すのみならず、引いては子々孫々にまで惡結果を招來するものであると云ふ深刻なる社會的見解にまで透徹して、偉大なる宗教的教訓を導き出したるは、其處に時代の進歩を認むると共に、ヒブル民族の宗教的天才の大偉を賞嘆せねばならない。

五

以下に示せる翻譯文中、各行の頭上の數字は粘土板上の行數を示すもの、……………は破損の箇所を、〔 〕は破損せる文字の殘存せる斷片よりの判讀若しくは推測せるもの、() は譯者の註である。譯文は出来るだけ原文の言葉の順序に従ひたれば讀み難き事を察する。第二部に於ては記事の重複せる二片を併列して對比せしめて置いた。

アダバ神話

一、(粘土板第一)

1. 彼は才智……………を持てり
2. 彼の命令はアヌ神の命令の如く……………
3. 彼(エア神)は彼に廣き耳を賦與して國土の運命を啓示し給へり
4. 彼は彼に智慧を賦與し給へり然ど永生をば賦與し給はざりき
5. 是等の日は等の時にエリド(邑)の智者なる彼を
6. エア神は衆人の首として創造し給へり
7. 彼は智者にして其の命令には誰も叛き得ず
8. 思慮深くしてアヌナキ人の中にて彼は最も賢き人なりき
9. 科なく手潔く膏灌(二)かれたる者神の誠を遵る者
10. 麴包焼人等と共に麵包を焼き
11. エリドの麵包焼人等と共に麵包を焼けり
12. 彼エリドの食物と飲水とを日毎用意せり
13. 其の潔き手を以て食卓を用意せり

14. 彼なくしては食卓は潔められず

15. 彼船を操りてエリドの爲に漁と狩とをなせり

16. その時エリドのアダバは

17. エア神其の寢室の床の上に臥し給ふ間は

18. 夜毎エリドの戸締を正しくなせり

19. 新月の埠頭なる清き埠頭にて船に乗れり

20. 風吹きて彼の船は走り出でぬ

21. 舵を以て彼は船を操りて

22. 廣き海上に漕ぎ出でぬ

.....

二、(粘土板第二並に第三對照)

1.

2. 南風〔吹きて彼を覆し〕

3. 〔魚?〕の住家へ彼を沈め給ひぬ^(三)

4. 『おゝ南風よ〔汝能ふ限り〕怒を〔増せよ〕』

5. 我は汝が翅を破らん^(四)』彼口を以て語れる時

6. 南風の翅は破られて七日の間

7. 南風は地上に吹かざりきアヌ神

8. 其の使者イラブラト神に宣ひけるは

9. 『何故に南風は七日の間も地上に吹かざるや』と

10. 其の使者イラブラト答て曰けるは『我主よ

11. エア神の子なるアダバ南風の翅を

12. 破れり』と アヌ神これらの言葉を聞きて

(1)それを聞ける時

13. 『助!』と叫びぬ 彼玉座に登りて曰けるは『誰か其者を我に引き來らしめよ』と

(五)

(2)彼の心怒に燃えて

(3)彼の使者を遣せり

14. 諸の天を知り給ふエア神も同じく彼を召喚しぬ

(4)大なる神々の心を知り給ふ彼

(5)〔……………〕

(6) 王なるエア神の元へ來れど

(7) 彼の下へ言葉を傳へしめぬ

(8) …………… 彼へ王なるエア神へ

(9) 彼は使者を遣せり

(10) 彼は大なる穎悟ある者にして大なる神々の心を知り

(11) 諸の天の…………… 定めたまへり

15. 「汚衣」を彼に纏はしめ、喪服を以て彼を覆ひ給へり

(12) 汚衣を彼に纏はしめ

16. 彼に衣服を着せ而して勸告して

(13) 喪服を彼に着せ

17. 曰けるは『アダバよ汝 王なるアヌ神の面前に行かば

(14) 言葉を彼に告げ給へり

(15) 『アダバよ 王なるエア神の面前に行かば

…………… 天に

18. (16) 吾が命を違へず吾が言葉を守れよ

19. 汝登り行きてアヌ神の門に近つかば

(17) 汝天に登り行きてアヌ神の門に近つかば

20. アヌ神の門にタンムヅ神とギシジダ神

(18) タンムヅ神とギシジダ神アヌ神の門に立ち居らん

21. 立ち居りて汝を視て汝に訊ねて曰はん「殿よ

22. 誰が爲めに汝は如斯基服裝をなすや アダバよ誰が爲に

23. 汝は喪服を纏ひ居るや」と「吾國土(即ち下界)にて二柱の神消失せ給ひし故に

24. 我は斯く装ひ居るなり」「其の二柱の神とは誰ぞや即ち汝が國土にて

25. 消失せ給ひし」「タンムヅ神とギシジダ神と」彼等相互に見交はして

26. 驚かん 好意ある言葉を

27. 彼等はアヌ神に申上げん アヌ神の麗はしき顔を

28. 彼等は汝に示さん 汝アヌ神の面前に立つ時

29. 死の食物を彼等は汝の前に供せん

30. 汝食ふこと勿れ 死の水を彼等は汝の前に供せん

31. 汝飲むこと勿れ 衣服を彼等は汝に供せん

32. 汝それを着よ 膏油を彼等は汝に供せん 汝己が身にそれを塗れよ

33. 吾が汝に與ふるこの命令を忘るゝこと勿れ 言葉を

34. 即ち吾が汝に語りし此の言葉を固く把持せよ(時に)アヌ神の

35. 使者出で來ぬ(アヌ神彼に命じて曰く)『アダバ南風の

36. 翅を破りたれば我面前に彼を伴れ來れよ』

37. 彼(使者)彼(アダバ)をして天に到るべき途に導きたれば彼天に登れり

38. 彼天に登りて アヌ神の門に近づきし時

39. アヌ神の門にタンムヅ神とギシジダ神立ち居たり

40. 彼等アダバを視し時叫びて曰ひけるは『助!』
(五)

41. 殿よ 誰が爲に汝は如斯基服裝をなすや

42. 誰が爲に汝は喪服を纏ふや』と

43. 『地上にて二柱の神消失せ給へり それ故に我は

44. 喪服を纏ひ居るなり』地上より消失せ給ひしと云ふ二柱の神とは誰なるや』

45. 『タンムヅ神とギシジダ神』彼等相互に見交はして

46. 驚きぬ アダバ 王なるアヌ神の面前に

47. 近づきし時アヌ神彼を視て叫び曰けるは
『アダバよ茲に來れ汝何とて南風の翹を』
48. 破りしや』 アダバ答へて曰く『アヌ神我主よ
49. 我れ我主エア神の神殿の爲に海の最中にて
50. 我は漁り居りぬ 海は恰も鏡(六)の如くなりき 時に
51. 南風吹き來りて我を覆しぬ
52. 〔我主〕の住家へと我をば沈めぬ 我が心の怒にて
53. 〔南風〕を呪(七)(?)ひぬ』 タンムツ神と
54. ギシジダ神答へて曰く『汝……………』アヌ神に向ひて
55. 彼等物語(執成し)りたれば彼の怒り和らぎて彼の心は……………
56. 何とてエア神は不淨なる人間に天と
57. 地との心(祕密)を啓示し給ひしぞ
58. 彼は既に彼(アダバ)を強(?)くなし 彼に名をも與へ給へり
59. 然らば我等彼に向ひて其の上に何をなすべきぞ 生命の食物をば
60. 持ち來りて彼に食はしめよ』 生命の食物を
61.

62. 彼等彼の處へ持ち來れり 然るに彼それを食はざりき 生命の水を

63. 彼等彼の處へ持ち來れり 然るに彼之を飲まざりき 衣服を

64. 彼等彼の處へ持ち來れり 彼之を身に着けぬ 膏油を

65. 彼等彼の處へ持ち來れり 彼之を身に塗りぬ

66. アヌ神彼を見て之を異しみぬ

67. 『來れアダバ汝何とて食ひ 何とて飲まざりしや

68. 故に汝は生きたることを得ざるべし 人間……………』我主エア神

69. 我に告げて「食ふ勿れ 飲む勿れ」と宣へり『我主エア神よ』

70. 彼を伴ひ彼の住むべき地(下界)へ連れ戻り給へ』

71. ……………彼をながめ給へり

(以下破損)

三、(粘土板第四)

1. ……………

2. 彼命じ給へり而して彼……………

3. 衣服を彼に命じ給へば彼即ち之を身に着けぬ

4. ……………アヌ神エア神の仕業に痛く驚きぬ
5. 天と地の凡ての神々曰く『誰か如斯く能ありや
6. 彼の命令は アヌ神の命令の如し 誰か彼に超らんや』と
7. 扱てアダバ地平線上より 天の頂を
8. ……………眺めし時 彼は己が恐怖(自ら惹起したる死の運命)を見たり
9. 「そは」アヌ神がアダバの上に下し給ひしものなり
10. エア神の ……………をば彼は満足になしぬ
11. アヌ神彼の運命として行末までも彼をば榮えの君主と定め給へり
12. ……………人類の種(父)なるアダバ
13. 彼は勇敢にも南風の翹を破りて
14. 天にまでも登れり 『斯くあらしめよ!』
15. 彼が 邪しまなる方法にて庶民の上に課したる……………
16. 彼が 庶民の肉體の上に置き給ひし疾病……………
17. ……………ニンカルラク神怒を解きぬ
18. 疾病〔來らん〕 彼の遣し給ふ疫は猖しからん

19. …………… 破滅彼の上に降らん
彼は心地よく眠りて休息するを得ざるべし
…………… 庶民の心の喜びを踏み躪らん

(以下破損)

註

- (一) 「廣き耳」とは顯悟又は理解を意味する表徴である。
(二) 「潔き手」は潔白の表徴である。
(三) 海神エア神の住家即ち龍宮の義か又は單に「魚」の住家即ち海中の義か破損の爲判定に苦しむ。Tarton 氏の譯に従
ひ。
(四) 風を鳥に比へしはバビロニヤには珍らしき事ではない。此地方にて最も劇しき暴風は南方より吹き来る。
(五) 窮迫の際救助を絶叫する語である、「スハ―大事」「大變！」とも譯すべきなれど原意の儘に譯して置いた。
(六) 原語の意義不詳にして學者其の説を異にす。Knutzon, Rogers に従つた。
(七) 原語は al-ta-sa-ar である。Knutzon, Rogers 氏等は achete ich auf: I took heed (?) を譯せるも共に疑を存せり、
以上の譯は Tarton 氏に依る。

四個の粘土板の翻字翻譯の出版は次の如し

- V. Scheil: Recueil de Travaux relatifs à la Philologie et à l'Archéologie Egyptiennes et Assyriennes, XX (1895), pp.
127, ff
II. Winckler und L. Abel: Der Thontafelfund von Tel-Amarna, No. 240
J.A. Knudtzon: Die Tel-Amarna Tafeln, No. 356 (1915)

P. Jensen: Keilinschriftliche Bibliothek, VI, 1, s. XVII, f

A. Strong: Proceedings of the Society of Biblical Archaeology, XVI (1894)

K.W. Rogers: Cuneiform Parallels to the Old Testament (1912) pp. 67—76

G.A. Barton: Archaeology and the Bible, (1917), Part II, IV, pp. 261—263

以上の中尤も新しき Knudtzon, Rogers, Barton 等を参照して右の和譯なものゝ。解説としては右の外次のものを推奨したい。

A.H. Sayce: The Religions of Ancient Egypt and Babylonia (1903), pp. 383ff

M. Jastrow, Jr.: The Religion of Babylonia and Assyria (1898), pp. 544ff

ク ク ク: Hebrew and Babylonian Tradition (1914), pp. 47ff

L. Spence: Myth and Legends of Babylonia and Assyria, pp. 116ff